

日英語の語レベルにおける相同性をめぐって

花崎 一夫

花崎 美紀

1. はじめに

「相同性」について花崎（2008）は以下のようにまとめている：

池上(1999)によると、「相同性(homology)」とは、もともと生物学において19世紀の中頃から使われ始めた用語であり、大きく分けて「発生的相同性」と「構造的相同性」の2つの解釈がありえると言う。

「発生的相同性」とは、もともと、生物学等で使われていた用法であり、「機能が異なっても起源が同じ」ものを指す。例えば、コウモリの翼と魚のヒレは現在それぞれ機能が異なっているが、元々同じ器官から進化してきたものなので、「発生的相同関係」にあるといえよう。

「構造的相同性」とは、構造主義との関連で使われているものであり、上記の生物学において論じられる概念を転用して、「関係性の並行性」という意味合いが強い。池上(2000)は、この相同性を説明するために、『ランダムハウス英語辞典』の「類似の関係に立っていること、相対的な位置、構造、などに関して対応関係にあること」という定義を引いている。図式に表すと、 $a: a' = b: b'$ ということである。ギロー（Guiraud 1971）による実例を挙げると、フランス語における chien（雄犬）—lion（雄ライオン）—chat（雄猫）という系列と、chienne（雌犬）—lionne（雌ライオン）—chatte（雌猫）という系列は「構造的な相同性」をもつといえよう。また、他の例をあげると、パノフスキー（Panofsky）はその著書『ゴシック建築とスコラ学』（*Gothic Architecture and Scholasticism*）（1957）において相同性という用語を数回使っているが、それは、ゴシック建築とスコラ学という一見全く関係のなさそうに見える2つの項に、著しい並行性があると主張している。つまり、ゴシック建築とスコラ学の間「関係性の並行性」があることを指摘しているわけである。

言語を扱う言語学において、「相同性」という言葉が使われるようになったのはつい最近のことであり、池上は1999年に、「残念なことに言語学との関連ではこの語が用いられることは通常ないようで、なじみも薄い」（池上1999:9）と言っているほどである。言語のこれまでの研究においてこの概念に最も近いのはホーキンス（Hawkins 1980, 1982）が使っている「カテゴリー横断的調和」（cross-category harmony）という概念であろうが、＜科学としての言語学＞の厳密さが謳われなくてはならず、また、今

ほど人間の認知システムがわかっていなかった当時の雰囲気では、言語外のものとの調和を求めるといよりはむしろ、言語内の様々なカテゴリー、つまり語カテゴリーや文カテゴリーなどにおいて、カテゴリーの枠を超えて同じような特徴が見受けられるということを求めるのが中心であった。昨今の、人間の認知体系により注目するようになってきた雰囲気においては、「相同性」は、言語内だけにおける相同性を求めるだけでなく、言語と認知体系や文化の間の相同性がとりざたされるようになってきて、その流れの中で、言語と文化の相同性というものが研究されるようになってきた。

こういう意味における、言語と文化の相同性とは、上の「構造的」な相同性をもつものであると同時に、「発生的」な相同性をもつものである。言語と文化はどちらも人間精神の産物であるから、その両者の間には、構造的にも、発生的にも相同性があるといえよう。構造的な相同性を求める研究は発見の科学であり、具体例の列挙であることが多いが（構造主義は非歴史的であることを考えれば当たり前である）、そこに発生的な視点を加えることによって、つまり、その発生源である人間精神に立ち返るような相同性を求めることによって、どうしてそのような相同性とその言語文化に存在するのかを説明することが可能になる。

まとめると、ここでいう言語と文化の相同性とは、発生源が同じであり、構造的に並行性を持っているものということがいえよう。

この考え方は、ブルデュー (Bourdieu 1972)の主張するハビトゥス (habitus) の概念とも相通じるものである。(Hanks p.c.) ブルデューはその著作の中でハビトゥスを明らかに規定はしていないが、池上によると、「人間が社会的な場であって、一方では社会的な規約に従うという制約、他方では自らの自由意志に基づく主体的な選択、という2つの要因の狭間であってどのように振る舞うかということの本質に関わるもの」(池上 1999: 462)であり、「規則に従って行動しているという意識なしに規則的な振る舞い方を生み出す元となる<性向>(disposition)である」(ibid.: 463)としている。つまり、ある社会に属する人々は、その社会で認められている規則的な振る舞いを無意識的にするが、その振る舞いには「元」があり、それをハビトゥスと呼んでいるわけである。また、それは「繰り返すことで無意識となる」(history turned into nature) (ブルデュー 1977: 78)という言葉に表れるとおり、教育によって教えられ、それを繰り返し実践(プラクティス)しているうちに、ほかの様々な事態に転移的に適応されるようになってくるものである。つまり、ハンクス (Hanks 1996) の言葉を借りると、ハビタスは「過去の経験に基づいて」いるものであり (Hanks 1996: 239)「認識そして行動に対するスキーマであり、場からは独立して存在しており、様々な場に相同性を作ることができるものである」。(ibid.: 241)

日英語について考えてみると、日本語は<ナル的・過程志向・無界的>、英語は<スル的・結果志向・有界的>な「相同性」をもつものとされている。(池上 1981, 1982, 2000 など) 具体的な例を挙げると、日本語では「切っても切れない」と言えるが、英語では“*I cut it, but I couldn't cut it.”とは言えない。また、「リンゴを食べた」と日本語では言えるが、英語では“*I ate apple.”とは言わず、リンゴが1個なのか2個以上なのかを言語化するのが原則である。これら2つの現象からみても、日本語には、無界

的な傾向が現れているのに対して、英語には有界的な傾向が現出していると言える。

本稿では、主に語レベルにおいて日本語では経過志向・無界的な傾向が現れているのに対して、英語では結果志向・有界的な傾向があらわれていることを検証する。具体的には、第2節で英語の前置詞である *in, at, on* を取り上げ、それらが有界的な性質を持つことを論じ、一方、対応する日本語の格助詞、に、を、では無界的な性質を持つこと示す。第3節では、日本語と英語のメタファーを比較することを通して、英語が結果志向・有界的であり、日本語が経過志向・無界的であることを検証する。

2. 場所を表す英語の前置詞と日本語の格助詞

まずはこのセクションで、取り上げる英語の前置詞と日本語の格助詞を概観する。

(1) a. Meg played *in* the park.

a'. メグは公園で遊んだ。

b. fly *in* the sky

b'. 空を飛ぶ

c. throw the ball *at* Meg

c'. メグにボールを投げる

これらの例からもわかるように、**action verb** であれ **motion verb** であれ、静止している「場所」を表すと思われる英語の前置詞と日本語の格助詞には一見対応関係があるように見える。ところが以下の例からもわかるように、二つの間には興味深い相違点がある。

(2) a. hit him/ 彼を殴る

b. give him a present/ 彼にプレゼントをあげる

まず初めに、日本語の「場所」を表すと思われる格助詞は対格や与格として使えるのに対して、英語ではそれらが文法化されている。

(3) a. stab with a knife/ ナイフで刺す

b. made from/ of wood/ 木で作る

また、(3)からもわかるように、日本語の「場所」を表すと思われる格助詞は「手段」を表すことができるが、英語では表すことができない。¹ この二点も念頭に置きながら、日本語の格助詞に、を、では経過志向・無界的な性質を持ち、英語の前置詞 *in, at, on* ²には結果志向・有界的な性質がみられることを以下のセクションで論じることとする。

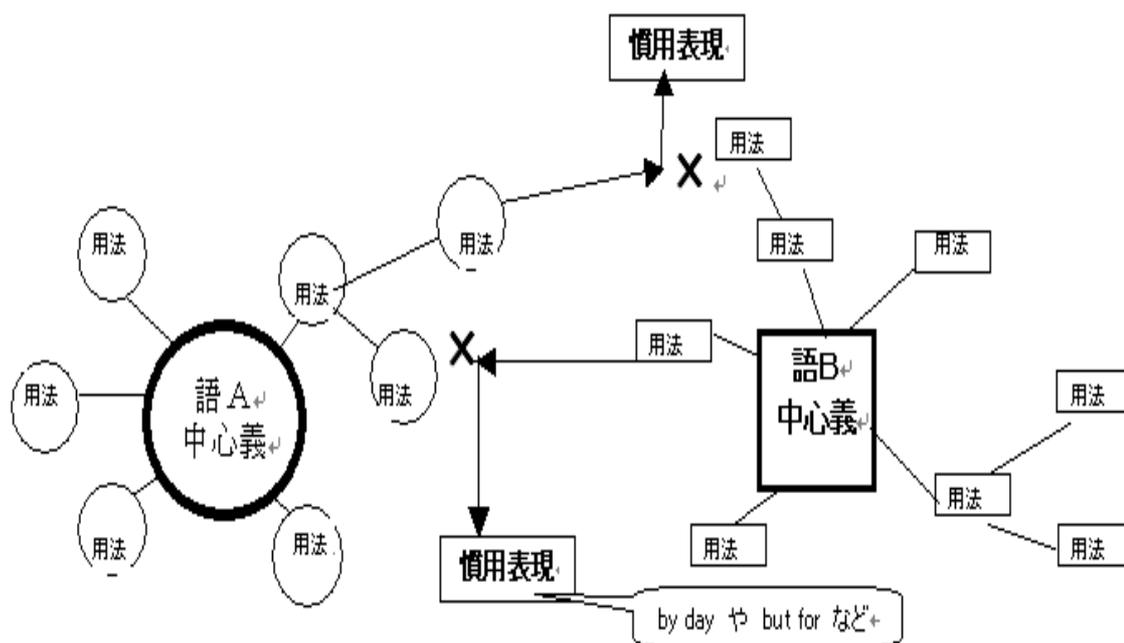
2.1. 理論的枠組み

前置詞を代表例とする多義語の研究は大きく2つに分かれる。一つめは、用法依存的なアプローチ、すなわち、認知言語学的なメタファーなどを用いるアプローチである。長所は、個々の多義語の意味解釈が説明可能になることであるが、一方で、意味拡張にメタファーを用いると際限なく意味が拡張し、意味拡張の予測が立てられない

ことになり、結果、後追いの理論になってしまうという点で問題がある。二つめは上位スキーマを求めるアプローチで、用法よりも抽象的なレベルに意味を求めるものである。コア理論（田中・松本 1997）はその代表例であり、なぜ多義的に個々の意味がでてくるのかという説明はできても、抽象的な意味を求めるため、どうしても用法の過剰生産を許してしまうのが難点である。

そこで本稿では、上記の2つのアプローチの長所を取り入れた PDN（並列弁別表記）モデル（加藤 2006, 加藤・花崎 2006, 花崎 2006）を採用し、意味の説明を行うことにする。PDN モデルとは、意味に中心的意味と用法の二つのレベルを認定し、中心的意味を設定することを通して後追い理論になることを防ぎ、用法を求めることを通して意味の過剰生産を許さないようにするものである。そして、中心的意味と用法は緊張関係を持つが、中心的意味から外れてしまう用法はなく、一方で用法が中心的意味を変化させることもあると考えるのが特徴である。また、際限なき意味拡張を防ぐツールとして、近似義語との棲み分けを考慮に入れる理論である。このモデルを図示すると以下ようになる。

(4) PDN モデルを用いた用法の拡張



上図で、*by day*（昼間に）は、*in* と *by* が競合した際に、*in* が競り勝ち、その結果として現在では *in* の意味になっている *by* の用法が慣用表現としてのみ残ったことを示している。このように前置詞の棲み分けをうまく説明できるのも PDN モデルの特徴である。以下、このモデルを援用して英語の前置詞と日本語の格助詞の意味について考察することとする。

2.2. 英語の前置詞 : *at, on, in*

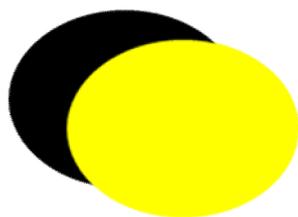
このセクションでは *at* との棲み分けを考えながら 3つの前置詞の意味について考察する。まずは Merriam Webster による *at* の意味と本稿が主張する *at* のイメージを以下に示す。

- | | | |
|-----|----------------------------|------------------------------------|
| (5) | a. presence in, or near | stay <i>at</i> a hotel |
| | b. goal of an action | angry <i>at</i> his brother |
| | c. occupied or employed | an expert <i>at</i> chess |
| | d. situation, condition | people <i>at</i> rest |
| | e. means, agency, cause | laugh <i>at</i> his joke |
| | f. rate, scale | proceed <i>at</i> 20 miles an hour |
| | g. age or position in time | retire <i>at</i> 60 |

(“*at*” in Merriam Webster)

上記の例から中心的意味を求めるとするならば、点と点の一致とすることができるであろう。それを図示すると下図のようになる。

- (6) *At* のイメージ



一例として f をみると、速度の数直線上の 20 マイルという一点と、前進している速度が合致するという状態を示しており、上図のように、2つの円の重なりでその状態を示すことができよう。

次に *in, on* についてであるが、まずは、*at* との棲み分けを示しながら、*on* と *in* の中心義を考えることにする。

At と *on* の棲み分けに関しては、(7)(8)の例を考えることが有効である。

- (7) a. He shot an arrow *at* the target.
b. He shot *at* her. (彼女に弾が当たっていなくても OK)
c. He shot her. (彼女に弾が命中した場合の表現)
d. They threw a stone *at* him, but missed.
e. Chris shot an arrow *at* him, but it missed.
- (8) a. She looked him *in* the eye.
b. *She looked him *at* the eye.

そして、それらの例から、*at* と *in* の弁別素性は、本稿では、以下のように考えることにする。

- (9) *in* は theme の最終状態を記述するのに対して、*at* は theme の最終状態を記述しない (花崎・加藤 2009:60)

(9)を仮定すれば、*at*は最終状態を記述しないので、もし(9b)のように*at*を用いれば、(7)の例で投げた石や放った矢が実際にターゲットに当たったかどうか分からないのと同様に、実際に目を見つめたのか見つめないのか分からないことになってしまい不適切であると説明できる。したがって(8a)のように、経路を示さず最終地点のみを示す、つまり、本稿で呼ぶところの「経路の捨象」³があり、最終状態を記述する*in*が必然的に選択されることになる。また、言うまでもなく、ランドマークの範囲が限定されているかいないかということも*at*と*in*の弁別素性であると考えられる。

次に*at*と*on*の弁別素性であるが、これについては本稿では、*at*が点と点の一致を表すのに対して、*on*は接触を意味すると考えることで区別が可能であると考えられることにする。

最後に*in*と*on*の弁別素性について考察する。

(10) a. She stabbed him *in/on* the back.

b. He touched me **in/on* the head.

c. He rapped me **in/on* the head.

d. He tapped me **in/on* the head.

e. He patted me **in/on* the head.

f. He slapped me *in/on* the head.

g. She punched him *in/*on* the chest.

これらのデータの観察から本論では(11)が言えると主張する

(11) a. 対象物の表面を越えて中にめり込むか否か (めり込む場合は*in*が使用される)

b. 対象物に対する働きかけに十分な強さがあり、かつ経路の捨象がある場合
(花崎・加藤 2009:58-59)

(11b)における「十分な強さがあり」とは、(i)打撃が強ければテイクバックが必要であり、そのため、(ii)動作開始から着点までにある程度の距離があることが前提となり、結果として、(iii)その距離が経路として認識される、というロジックを一言で述べたものである。また、*throw the book in the wastebasket.*におけるPPの*in the wastebasket*はthemeである*the book*の最終的な位置を表しているが、このように、themeの途中の経路に触れずにthemeの最終位置を表現することを経路の捨象と呼ぶことにする。(11)により、(10)のデータは次のように説明される。aやgのように「めり込む」ことを含意する場合には、ほぼ*in*を用いる。つまり、(10a)は(11a)によって*in*しか選ばれない。また、(10g)で使われている動詞の*punch*は、十分な強さがあるのがデフォルトであると考えられる。したがって、(11b)より*in*が選ばれるのが典型的である。一方、「めり込む」ことを含意しない*touch/rap/tap/pat*では*in*を用いることはほぼないと言ってよく、*on*を用いるのが標準的である。つまり、(10b,c,d,e)の場合、(11b)の定義から「十分な強さ」があるとは言えないので*in*が選ばれることはないと説明できる。また(10f)のように、動詞が*slap*の場合は、*in*と*on*の両方を使用することが可能であるが、それは*slap*は、「強さ」に関しては無標であると考えられるからである。つまり*slap*は強い場合も弱い場合もありうる。したがって(11b)により*in*が選択される場合と、

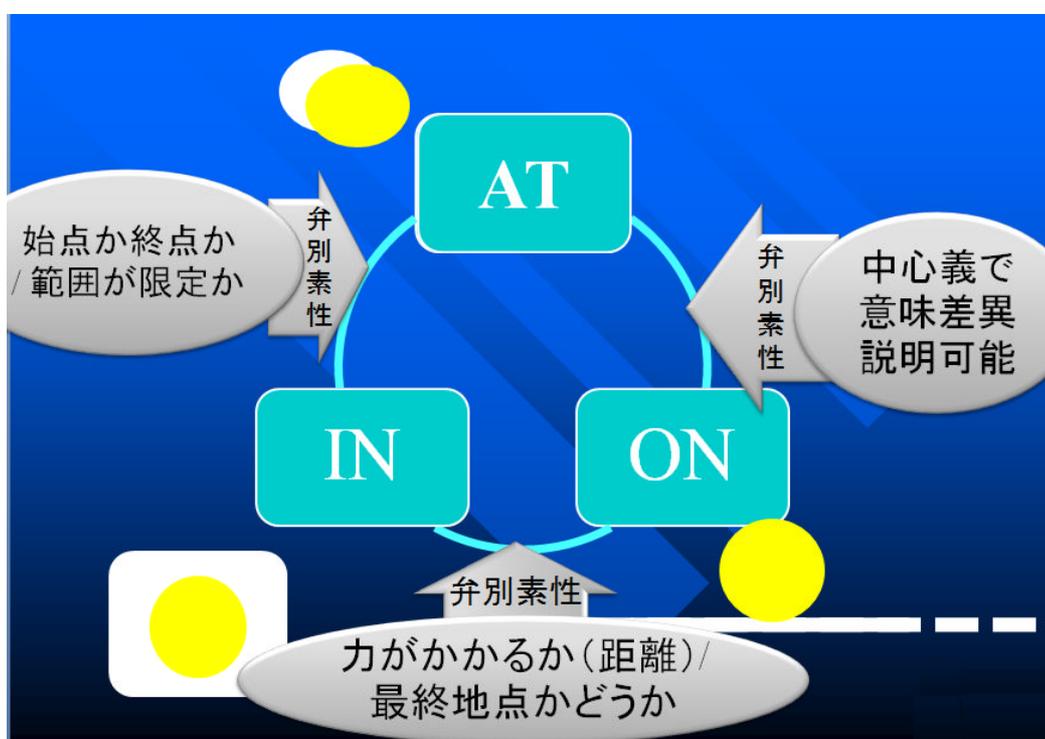
接触の意味で *on* が選択される場合が生じるのである。

以上の議論から本稿では、(11)が *in* と *on* の弁別素性であることを主張する。*on* が「接触」を表すのに対して、*in* が「ある範囲の中」を意味するというに加えて(11)を弁別素性として仮定するわけである。

以上をまとめると、PDN モデルの観点から各前置詞間の弁別素性を仮定して意味の記述を行ったが、基本的な意味は、トラジェクターとランドマークが重なって点となっているか (*at* の場合)、トラジェクターがランドマークの中に位置しているか (*in* の場合)、トラジェクターがランドマークに接しているか (*on* の場合)、すなわち、いずれも空間における二つのモノの位置を表しているということになる。

これらを図示すると、(12)のようになると言えよう。

(12)



この図からも明らかなおおり、これらの前置詞は2つの「モノ」の空間的位置関係として図示することができる、つまり、これらの英語の前置詞は有界的な意味を持っていると結論づけることができるわけである。

2.3. 日本語の格助詞に、を、で

にの先行研究としては、着点が「に」の中心義であると主張した堀川(1988)、密着性であると主張した國廣(1986)、場所であるとした浅利(2001)、存在の場所であるとした岡(2005)、個体の位置であるとした中右・西村(1998)などが挙げられるが、全体的には着点を主張したものが多い。となると、彼にもらったのような起点の意味のにをどう説明するのが問題になる。その反省もあってか、最近では「場所」の意味を主張する研究が多くなっているが、そうすると今度は「で」との区別がつかなくなってし

まう。そこで Ikegami(1999)では、はしごに登った⁴ においては登り切ったことを含意するので、この「に」は goal of motion であるという主張をしている。本稿では池上(1999)に従って「に」は基本的に goal of motion を意味すると考えるが、菅井(2007)からの用例をもとに、以下これで「に」の用法を説明できるかどうかを見ていくことにする。

(13) ニの意味

- | | | |
|---------|------------|-----------|
| 1. 方向 | 内側に曲げる | |
| 2. 到達点 | 山に登る | |
| 3. 密着点 | 手にインクがつく | |
| 4. 収斂点 | スープに入れる | |
| 5. 目的 | 食事に誘う | |
| 6. 伝達先 | 子供に教える | |
| 7. 要素 | 才能に満ちる | |
| 8. 結果 | さなぎになる | |
| 9. 経験者 | 太郎にも解ける | |
| 10. 起点 | 私は友達に本を借りる | |
| 11. 動作主 | 両親に反対される | |
| 12. 原因 | 暑さに気を失う | |
| 13. 時間 | 5時に集合した | (菅井 2007) |

スペースの都合上すべての用法を見ることはできないので、まずはもっとも用例として多い到達点について考えると、これは山に登るからわかるように goal of motion で説明できる。そして、最大の問題である「起点」であるが、これも goal of motion で説明が可能である。「私は友達に本を借りる」は、友達が A で私を B とすると、借りたモノは A から B へ動いたことを意味する。確かに、動作の起点は A かもしれないが、このように「に」格で起点を表せるのは、借りる、殴られる、もらう、反対されるというような動詞に限定されていて、これらの動詞には、必ず対応する貸す、殴る、あげる、反対するといった動詞があり、借りるなどの動詞は B の方に視点があるものばかりである。したがって、Langacker(1990)などで指摘されている「心的スキャニング」を援用すれば、「私は友達に本を借りる」においては B から A への心的スキャニングが行われていると考えられ、「に」はその goal of motion を示していると思えることが可能であろう。⁵

次に「ヲ」について考察する。先行研究としては、中心義は対象と場所の二つであると主張した山田(1908, 1936)、対象格と場所格とした加藤重広(2006)、他動の他者、経路、起点であると主張した橋本(1969)などが挙げられるが、ほとんどの研究は、対象と場所を2つに分けた上でその一つは他動格、もう一つは経路や場所と議論している。「ヲ」に特徴的なのは、鳥が空を飛んでいるのように、対格を表す語が位置をも表しているということである。Ikegami(1999)では「ヲ」は path of motion と主張しているが、その根拠は、例えば、はしごを登ると言った場合には、はしごに登ると比較すると、まだ登っていることを焦点化していると言えるからである。本稿でも

Ikegami(1999)に従えばヲの意味が説明できると考える。以下、具体的に考察してみる。

(14) ヲの意味

- | | |
|-------------|------------------------------|
| a. 接続助詞の「を」 | 使い方がわからないのを適当にいじる |
| b. 状況補語 | 大雨の中をはしる |
| c. 対象格 | 太郎は大きな箱を出した |
| d. 離格 | 先ほど到着した新幹線が
大宮駅を(*から)発車した |
| e. 通過点 | 新横浜駅を通過する |
| f. 経路 | 封鎖されていたレインボーブリッジを突破する |
| g. 移動領域 | 空を飛ぶ (加藤重広 2006) |

加藤重広(2006)によると、ヲの意味は(14)で示した7つにまとめられる。そのうち、中心的な対象格、離格、経路を取り上げて説明する。離格で「から」を使えないのは、「から」が使えるのは複数の選択肢がある中から1つを選ぶ場合に限られるからである。つまり(14d)においては、大宮駅は新幹線にとっての経路であると考えられるから、この「ヲ」は *path of motion* で説明できる。一方(14c)の対象格であるが、それは(14f)との関係で説明が可能である。つまり(14f)で経路とされている「ヲ」は、別の見方をすれば、レインボーブリッジは突破すべき対象であるので対象格として見る事が可能である。つまり、経路と対象格は近い関係にあると考えることができることになる。以上の考察から「ヲ」を *path of motion* の意味、すなわち無界的な意味をもつと考えることで中心的なデータの説明が可能になると言える。

最後に「デ」について考察する。「で」は非常に多義であり、ほとんどの先行研究は場所としている。(間渕 2000, 森山 2004 など)「で」の語源は、Ikegami(1999)によると「にて」であり、それが音変化をへて「で」になったと考えられるので、場所を中心義とするのにも一理ある。ただ、問題になるのは、場所の意味からいかにして箸で食べるのような「道具」の意味を導き出すかということである。本稿では、菅井(1997)に従って、「で」の意味は、場所よりも多義をより説明できる「背景格」として考える。以下、これに基づいてデータの説明を試みることにする。

(15) デの意味

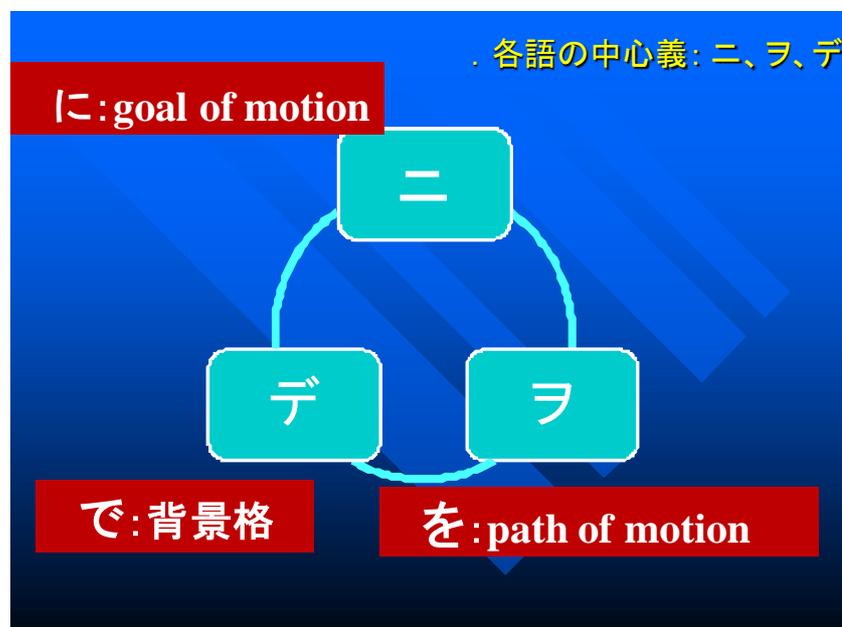
- | | |
|----------|------------|
| 1. 場所 | アメリカで開かれる |
| 2. 抽象的场所 | 彼の計画で扱われない |
| 3. 範囲 | 世界で一番高い山 |
| 4. 数量限定 | 30人で締め切り |
| 5. 動作主 | 警察で捜査しています |
| 6. 時間 | 食事の後で |
| 7. 期間 | 成長の過程で現れる |
| 8. 時限定 | 明日で終わり |
| 9. 道具 | 箸で食べる |
| 10. 手段 | 地下鉄で来ます |
| 11. 材料 | 木でできている |

- | | | |
|---------------|-----------|-----------|
| 12. 構成要素 | ～という題目で書く | |
| 13. 原因 | 病気で休む | |
| 14. 理由 | そういう点で面白い | |
| 15. 根拠 | 試験結果で判断 | |
| 16. 目的 | 出張で大阪へ行く | |
| 17. 動作主の様態 | 自分で作る | |
| 18. 動作対象の様態 | 小さな音で聞く | |
| 19. 作用・出来事の様態 | 猛スピードで走る | (菅井 1997) |

「原因」と「場所」は、中右・西村(1998)でも主張されているように、場所も原因も「に」と違って **adjunct** であり、その場所をもとに考えるという意味において同一のものとして扱うことが可能である。さらに、「原因」と「材料」はともにある場所から「で」というイメージでつながってくる。ここで問題になるのが「道具」の意味であるが、棒で作るという例を考えてみると、普通は「材料」であると解釈されるであろうが、「道具」と考えられないわけでもない。つまり、どちらも手元にあるモノという意味であるが、それが主に加工されるときは「材料」、加工されるモノでない、すなわち棒をつかって何かほかのものを作るような文脈では「道具」と解釈することも可能である。以上の考察から、「場所」＝「原因」、「原因」＝「材料」、さらには「材料」＝「道具」というつながりが示されたことになり、「場所」と「道具」の意味がつながったことになる。したがって「で」は、場所、さらには、「原因」、「様態」、「道具」をも含むことのできる「背景格」としてとらえられることになる。すなわち「で」は無界的な性質を持っていると主張することができるのである。

以上、日本語の格助詞に、を、でについて考察したが、図でまとめると以下のようなになる。ここで注目に値するのは、扱った前置詞は2つの「モノ」の空間的な関係で図示できる、すなわち「モノ」の関係を表すという点において有界的であるのに対して、扱った日本語の格助詞は、2つの「モノ」の関係として図示できない無界的なものであるということである。

(16) ニ・ヲ・デの中心義



2.4. まとめ

At, on, in は、それぞれ、トラジェクターとランドマークの一致した点、接触している場所、トラジェクターがランドマークに含まれているという場所、つまり、トラジェクター、そしてランドマークという、有界的なくモノ>の空間関係を示すモノということがわかったが、日本語の対応物である格助詞は、*goal of motion, path of motion*, 背景格と、ただ単に、2つのモノの空間的な位置を示すわけではなく、例えば、たとえ *goal* という地点を表すように見えても、それは、*goal of MOTION* であるという具合に、*path* を必ず意識しているものであると言える。つまり、*goal of motion, path of motion*, 背景格というように、空間を表しているかのように見える語は、実は、無界的な *path*、背景を表していると言える。そしてこの結論は、このセクションの冒頭で指摘した2点の事実、すなわち、日本語の「場所」を表す格助詞は対格や与格として使うことができるし、また「手段」を表すことができるという事実からも支持される。

3. メタファーにおける日英語間の相違点

このセクションでは、存在のメタファーに焦点をあてて、日英語間の相違点を浮き彫りにさせる。存在のメタファーとは、抽象的なものを「物体」や「物質」など、実体のある具象物としてとらえるメタファーで、この中には日英語間で顕著な差が見られるものが存在する。⁶

(17) a. Inflation is lowering our standard of living.

b. Inflation is backing us into a corner.

c. Inflation is taking its toll at the checkout counter and the gas pump.

(Lakoff & Johnson 1980: 26)

(17)の例ではいずれもインフレを具象物としてとらえているが、これらの表現に対応する日本語の表現を考えるとおよそ(18)のようになる。

(18) a. インフレの状況下で、(われわれの)生活水準が低下している。

b. インフレのせいで、(われわれは)窮地に追い込まれている。

c. インフレのつけがスーパーで買い物をしたり、車にガソリンを入れる時に回ってきている。

日本語の表現では、インフレを1つの存在物としてとらえるというよりはむしろ、我々人間が社会の中で置かれている状況としてとらえている。池上(2006)でも指摘されているように、語り手を含めた自己を状況の中に埋没させ、臨場的に体験を述べていると考えられる。言い換えれば、話し手は自分が臨場している事態の中に身を置いたままで、その視座から事態把握をしているのである。ゆえに、日本語の表現は自己を埋没させ、抽象物を存在物としてとらえないという点において、無界的な傾向を示していると言える。⁷

(19) a. I have him in sight.

a'. 彼は私の見えるところにいる。？彼は私の視界の中にいる。

b. I can't see him—the tree is in the way.

b'. 彼が見えない—その木がじゃまになっている。

c. He's out of sight.

c'. もう彼は見えない。？彼は視野の外にいる。

d. There's nothing in sight.

d'. なにも見えない。？視野の中にはなにもない。

さらに例を見てみると、英語では「視野」が「容器」すなわち存在物としてとらえられているのに対して、日本語の表現は、(19a')からもわかるように、「私の見えるところ」という境界がはっきりしない無界的な表現になっている。また、(19b')からは状況を無界的に表現するのが日本語の特徴であると言える。

さらに英語においては、「状態の変化が容器の中への運動である」というメタファーも観察される。

(20) a. His behavior *sent me into* a fury.

a'. 彼の行動によって私は激怒した。

b. She *went crazy*.

c. The news *threw him into* a terrible state of anxiety.

c'. そのニュースを聞いて、彼はひどく不安な状態になった。

d. He *flew into* a rage.

(Kövecses 2005: 154)

このメタファーは、「状態の変化は運動である」と「状態は場所を表す」という2つのメタファーを組み合わせたものであるが、日本語では、状態が場所を表す英語 (*in anger* など) と違って、状態を場所で表すのは標準的ではないし、彼女は狂った状態に行っただと言わないことからわかるように、状態の変化が運動を表すことは不自然なので、この2つの組み合わせはさらに難しいものになる。ここには、本稿の冒頭で述べた、英語は<スル的>な言語であるのに対して、日本語は<ナル的>な言語であるという対比がよく現れていると言えよう。

さらに付け加えるならば、同じ単語を用いていると考えられる場合でも、日本語と英語ではニュアンスの違いが観察されると大石(2008)で指摘されている。すなわち、英語では *His anger exploded.* と言えるが、**His joy exploded.* とは言えないのに対して、日本語では、彼は怒りを爆発させた、彼は喜びを爆発させた、ともにOKになる。大石(2008)によれば、日本語の「爆発」が発散の激しさのみを重視し、結果の悲惨さを含意しないのに対して、英語の *explode* は結果の悲惨さを含意するので、喜びの場合には使えないとのことである。ここにも日本語の経過志向、英語の結果志向が現れていると言えるであろう。

以上の考察から、英語は<スル>的な言語であり、<モノ> (有界) 的な表現への志向性が強いのに対して、日本語は<ナル>的な言語であり、<コト> (無界) 的な表現への志向性が強いということがメタファーの観点からも実証されたと言えるであろう。⁸

4. 結語

本稿では、英語の前置詞である *in, at, on* を取り上げ、それらが有界的な性質を持つことを検証し、一方、対応する日本語の格助詞、で、に、をには無界的な性質があることを示した。さらには、メタファーの観点から日本語と英語を比較することを通して、英語が結果志向・有界的であり、日本語が経過志向・無界的であることを示した。これらの実証的な研究を通して、改めて語レベルでの相同性が存在することを確認したわけである。今後の課題としては、さらに文レベル、談話レベル、文化・コミュニケーションレベルでの相同性も併せて検討し、言語の発生源である認知構造との相同性、すなわち「発生的相同性」を求めることを通して、言語を通してみる人類学研究の可能性を追求することが重要になるであろう。

注

¹ *in English* や *on radio* は手段を表していると言えるかもしれないが、例えば、*in English* の例は *in ink* や *in pencil* などと同様、本稿で援用する PDN モデルによれば、イディオムとして残った特殊な用法であると考えられる。

² 場所を表す前置詞としては、これ以外にも *by* が考えられるが、Hanazaki, M & Kato (2003, 2004) において、*by* の中心義は「～を通して」に変化していると論じており、ここでは静止している場所を表す前置詞としては扱わないことにする。また、もう一つ *to* も考えられるが、これは「方向」を表すとする論も多いので、ここでは扱わないこととする。

³ 経路の捨象とは、例えば、*throw the book in the wastebasket* における PP の *in the wastebasket* は theme である *the book* の最終的な位置を表しているが、このように、theme の途中の経路に触れずに theme の最終位置を表現することをさす。

⁴ ちなみに「はしごを登る」はまだ登っていることを焦点化するので、Ikegami(1999)では、この「を」は *path of motion* と考えている。

⁵ (i) a. *Beyond the 2000 meter level, the trail {rises/ falls/ ascends/ descends} quite sharply.*

b. *The new highway {goes/ runs/ climbs} from the valley floor to the senator's mountain lodge.*
(Langacker 1990: 19)

(i) のような言語表現は、主体移動表現と呼ばれるものである。Langacker(1990)は、この主体移動表現における移動動詞を、主語で表された対象の形状をたどるという概念化者の主体的移動、すなわち概念化者の「心的スキャニング」を表す言語表現であるとしている。借りるという表現を巡っても、この「心的スキャニング」が関係していると本稿では主張する。

⁶ 厳密に言えば、語レベルの考察ではないかもしれないが、英語を見た限りでは、抽象的なものを具象物としてとらえているので、一応本稿では語レベルの考察と考えることとする。

⁷ 注の 6 でも指摘したように、抽象的なものを具象物としてとらえるという意味で英語の表現は有界的と言えるのに対して、日本語の対応する表現は、厳密には、語レベルでの無界性を示しているとは言えない。しかしながら、英語で有界的にとらえているものを日本語ではそのようにとらえず、境界をぼかしてとらえているという意味において無界的である、ということが可能であると思われる。

⁸ (18) a. *インフレの状況下で、(われわれの) 生活水準が低下している。*

b. *インフレのせいで、(われわれは) 窮地に追い込まれている。*

これらの例文からもわかるように、日本語ではわれわれのような主体は言語化しない方が普通である。この意味でも語り手を含めた当事者を状況の中に埋没させるのが典型的であると言える。

ここであえて<コト>的な表現という言い方をしたが、無界的な表現が<コト>的であるというのは池上(1982)でも指摘されている。例えば、英語では *Instead of a pointing finger, the image of an arrow has been adopted.* と表現されるのに対して、日本語では? 指し示す指の代わりとして、矢印が採用された、とは普通は言わず、指で指し示すことの代わりとして、矢印が採用された、のよ
うに<コト>的すなわち、無界的な表現が好まれるということである。

参考文献

- 浅利 誠. (2001) 「西田幾多郎と日本語：場所の論理と助詞」 『環』 Vol.4, pp. 130-140. 藤原書店
- Bourdieu, P. (1972, 1977) *Outline of a Theory of Practice*. trans. R. Nice. Cambridge: Cambridge U.P.
- Guiraud, P. (1971) *La Semiologie*. Paris: Presse Universitaires de France. 佐藤信夫訳(1972) 『記号論』 白水社
- 花崎美紀. (2006) 「「上」を表す前置詞の多義を棲み分け」、日本英語学会 WS.
- . (2008) 「言語と文化の相同性」『開放系言語学への招待—文化・認知・コミュニケーション』 慶応大学出版会 pp. 21-36.
- Hanazaki, Miki & Kozo Kato (2003) “The Semantic Network of *By*”, *Studies in Modern English: the Twentieth Anniversary Publication of Modern English Association of Japan*, 英潮社、pp.337-352.
- (2004) “The Semantic Network of *By* Revisited”, 『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』 第 38 号、pp. 23-38.
- 花崎一夫・加藤鉦三. (2009) 「前置詞の棲み分け—in と on を中心にして」 pp. 53-62. 英文学研究 支部統合号
- Hanks, William (1996) *Language and Communicative Practices*. Boulder: Westview Press.
- 橋本進吉. (1969) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店
- Hawkins J. A. (1980) "On Implicational and Distributional Universals of Word Order" *Journal of Linguistics* 16.
- (1982) "Cross-Category Harmony, X-Bar and the Predictions of Markedness" *Journal of Linguistics* 18. pp. 1-35.
- 堀川智也. (1988) 「格助詞『に』の意味についての一考察」『東京大学言語学論集'88』pp.321-333.
- 池上嘉彦. (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- . (1982) 「表現構造の比較—<スル>的な言語を<ナル>的な言語— 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』 pp. 67-110. 大修館書店
- (1999-2001) 「‘Bounded’ vs. ‘Unbounded’ と ‘Cross-category Harmony’(1)~(24)」『英語青年』 1999年4月号~2001年3月号.
- Ikegami, Yoshihiko. (1999) "The Path and the Goal. On the Function of the NP Marked by the Postposition "o" Complementing the Verb of Motion and of Action in Japanese" in *Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen* pp. 25-47.
- 池上嘉彦. (2000) 『日本語論への招待』 講談社
- . (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』 NHK ブックス
- . (2008) 「人文学研究における作業仮説としての<相同性>」 日本英文学会中部支部第60回大会特別講演
- 加藤鉦三. (2006) “並列弁別表記モデルのラフスケッチ” ms. 信州大学
- 加藤鉦三・花崎美紀. (2006) 「Over の意味論」2006年10月, 日本英文学会中部支部第58回大

-
- 会(三重大学)
- 加藤重広. (2006) 「対象格と場所格の連続性—格助詞試論(2)—」 『北大文学研究科紀要』 118, pp. 135-182.
- 國廣哲弥. (1986) 「意味論入門」 『言語』 15-12. pp. 194-202.
- Lakoff, George, and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langancker, Ronald W. (1990) “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1 (1): 5-38.
- Kövecses, Zoltán. (2005). *Metaphor in culture: Universality and variation*. New York: Cambridge University Press.
- 中右実・西村義樹. (1998) 『構文と事象構造』 研究社
- 間淵洋子. (2000) 「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」 『国語学』 第 51-1 号, pp. 15-30.
- 森山新. (2004) 「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得の関係」 『日本認知言語学会論文集』 Vol.4, pp. 66-76.
- 岡智之. (2005) 「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」 『日本認知言語学会論文集』 Vol.5, pp. 12-21.
- 大石亨. (2008) 「感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考察」 『日本認知言語学会論文集 第 8 巻』 pp. 274-284.
- Panofsky, E. (1975 [1957]) *Gothic Architecture and Scholasticism*. New York: Meridian Books.
- 菅井三実. (1997) 「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」 『名古屋大学文学部研究論集』 Vol.127, pp. 23-40.
- 菅井 三実. (2007) 「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」 『世界の日本語教育』 17. pp. 113-135.
- 田中茂範・松本曜. (1997) 『空間と移動の表現』 研究社
- 山田孝雄. (1908) 『日本文法論』 宝文館
- . (1936) 『日本文法論概論』 宝文館

(信州大学 全学教育機構 准教授)
(信州大学 人文学部 准教授)
2009年2月23日 採録決定